
魔法世界と高校生

藤枝夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界と高校生

【Nコード】

N4099Z

【作者名】

藤枝夏彦

【あらすじ】

2030年

現代の魔法はかなり手軽なものになり誰でも使用出来るようになった。

登校

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えたりして行うが、この世界では違う。魔法を使用するには魔法結晶石まほうけつしよせきが必要となる。

魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。

人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。

魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきで変換する必要があるのだ。

けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。例えるなら拳銃と
かと同じで弾数が無くなると使用出来なくなるのである。

使用出来なくなった「魔法結晶石まほうけつしよせき」は専門のショップに持っていき
補充する必要がある。

補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきに変換すれば
再び使用する事が出来る。

魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の6種類
と補助魔法に分けられる。

基本攻撃系魔法は6種類の中の1種類しか使えないが補助魔法は別
で誰でも気軽に使用する事が
できる。

今、この世界には4つの魔法高校が存在する。

ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の4校である。

このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける
事が出来るので毎年何万人もの
受験生がいるのである。

これがこの世界における魔法である。

「4月15日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。 といっても
1週間前が入学式

なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、今日が初登校にな
る。

なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中であ
る。

「これは完全に遅刻コースだな」

「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなんだが・・・」

髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで目にかかる位、制服を少
し着崩して着ている

「志木野春樹しきの はるき」

は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確
認すると

「電源入ってねえじゃねーかよ!」

と一人で叫び

「参ったな、入学式に出れなかったし、今日が初登校になるのに初
日から遅刻か」

つと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペース
が落ちていた。

「はあ、はあ、はあー」

春樹は息を切らしながら

「あーだめだキツイ諦めるか。」

つと完全に走ることを諦め歩き出し

(少し体力落ちたか・・・完全運動不足だな。ここの学校受かる為に勉強ばっかしてたからな。)

とか

(この学校どんだけ広いんだよ)

っと思いなながら春樹は学校への道を歩いていた。

ちなみにこの学校の広さは半径10キロにも及ぶ広大な学校である。

この敷地内に学生寮

があるのだが校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。一応自転車通学も可能であるが

春樹は持つていないので徒歩になる。

(8時15分か 確かHRは8時半だったか。まだここからだとも分位掛かるか)

っと思いなながら通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。

(俺と一緒に遅刻組みか)

っとか心の中で思いなながら歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあった桜を眺めだした。

「・・・・・・・・・・綺麗」

っとその生徒は小さく呟いた。後ろを歩いていた春樹は

「綺麗ってもう桜の花も大分散ってる」

っと思樹はその女生徒に話しかけていた。

「えっ？」

と言い少し驚いた女生徒はこちらを振り返った。その女生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言言葉が凄く似合う少女であった。

「あ、いや悪い」

っと思樹は

(なんで俺今話しかけたんだ。)

「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし・・・」

「でも私って桜観たのって初めてなの。」

つと女生徒は少し寂しそうな顔で答えた。

「いいの？このままじゃと授業に間に合わないよ」

つと女生徒が春樹に話しかけてきた。

「おつとそうだそうだ」

さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思った春樹は

「じゃあ俺は先に行く。」

「君はいいのか？」

春樹はそう女生徒に「尋ねると

「うん。私はもうちよつと桜を観てから行くから。」

「わかった。じゃ悪いが先に行かしてもらおう。」

といい別れ際に

「俺は志木野春樹だ。」

つと女生徒に言うつと

「うん。よろしく私は冬野雪音^{ふゆのゆきね}」

つと彼女が答えてくれたので春樹は手を上げ別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていった。まだ廊下

には生徒が何人かいておそらくHRが終わったばかりなのであろう。その中で春樹は

（え〜つと職員室だよなつてえ職員室て何処だよ。くそお学校の中も広すぎだ。）

つと思ひ広い校内を歩いていると

「おおいいい！！！」

と後ろから怒号をいわれ振り返ると

「おい！お前1年だろ！なんでこっちの校舎歩いていやがる！」

と金髪ピアスの男がこちらに歩み寄ってきた。近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子」

や

「1年生だからこのルール知らないのかな？」

「私、先生呼んでくる。」

などと、周りにいた女生徒達はちよとしたパニックになっていた。

春樹は

（初日から最悪だなまさか絡まれるとは・・・俺的には目立ちたくないんだが・・・）

つとか考えているとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て

「おい！聞いてんのか！」

つと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので

「はい、聞いています」

つと答え

「すみません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違えてこっちの校舎に入って

しまったんです。」

春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は

「ちっ」

と舌打ちをして

「職員室は向ここの校舎だ。さっさと行け」

と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペッコ」

と1度頭を下げその場を後にした。

登校（後書き）

初小説になります。

初登校そして出会い2

春樹は金髪ピアス男子生徒にいわれた校舎に行くとすぐに職員室が見つかり、春樹は

「あっこか」

「コンコン」

と2回職員室の扉をノックし

「失礼します」

つといい春樹は職員室の中に入っていった。

職員室の中はまるで図書館のようで魔道書や参考書などが積み上げられ本当

に職員室か？と思う程である。春樹はすぐ傍にいたの男性教諭に

「あの〜すみません」

つと声をかけ

「今日からここの学校でお世話になります。志木野春樹しきのはの くるです。」

つと男性教諭に挨拶すると

「ああ1年生の子かあちよつと待って」

角刈りでいかにも体育教師丸出しな男性教諭が大きな声で

「二条先生、二条先生、先生の所の生徒がやつと着ましたよ」

と呼ぶと奥の本の山の方から

「は〜い今行きます。」

つと奥の本の山から淡い栗色の茶色の髪で腰くらいまでの長さの髪でかなり童顔身長も春樹よりかなり低くまるで同い年の同級生みたいな女性出てきて

「あ〜君が志木野春樹君ね。ようこそ魔法騎士高校へ。あたしは君の担任の二条未来にじょうみらいよろしくね。科目は魔法学ね

「つてか来るの遅いよ志木野君もつHR終わっちゃてるからね。」
「少し怒り気味で春樹に近づき

「志木野君次遅刻したらぶん殴るよ」

満面の笑みで拳を握り怖い事を言ってきた。

（教師が生徒をぶん殴るつて。 いいのかよ・・・）

春樹が苦笑しながらそんな事を考えていると

「じゃあ1限目あたしの授業だからその時にクラスの皆に紹介する
ね あつ志木野君の

クラスは1-4だから」

「あつ、ちなみにランクはFね。」

と担任の二条が笑いながら言ってきたので

春樹はコクンと頷き

「はい、わかりました。」

と答えた。

「じゃあちよつとあたし授業の準備してるからそこでちよつと待っ
ててね。」

といいまた担任の二条は本の山へ消えていった。

（Fランクねえ・・・まあ俺の今の状態だつたらFランクがいい所
だよな・・・

まあその方がいいか目立たなくて・・・色々と・・・）

春樹は「くすつと」誰にも気づかれないくらいの笑みを浮かべた。

その場で待たされ待つ事5分程で担任の二条未来が片手に教科書も
持って現れ

「いやぁお待たせお待たせじゃあ志木野君教室行こつか」

つと二条がいい

「あつ、はい」

と春樹は答えた。

教室に向かう途中で春樹は二条に

「そういえば先生は魔法ランクはいくつなんですか？」

そう聞く右手を腰にあて二条は笑いながら

「あつは あたしのランクはBランクだよ」

つと胸を張っていつてきた

「魔法ランク」

とはSランクからFランクの7段階で決められ、この世界でもSランクの魔道師は20人しかない
ないこの20人は「大魔道師^{だいまどうし}」と呼ばれている。 主にこの世界を動かしている人間がこの20人である。

「Aランク魔道師」

このAランク魔道師でも300人程しかない。その殆どが魔法騎^{まほうき}士である。

「魔法騎士^{まほうきし}」

とは魔法が使える警察みたいな者である。 ちなみにこの「魔法騎士」に席を置くには

かなりの至難であり超エリートでも必ず入れるものではない。

「Bランク」

だからこのBランクでも世間一般ではエリートなのである。

Fランクとはその中でも1番下なので使える魔法の種類も一般人のそれとほぼ変わらない

位である。 この学校では最低でも卒業までにはCランク魔道師になれる様に教育が行われる。

「あ、志木野君教室ここだよ。」

どうやらここが教室らしい。廊下の一番端の教室に1-4と書かれ

たプレート
そして、

「春樹の運命を大きくかえる事になる者達に出会う。」

初登校そして出会い②（後書き）

今回は少し短いです・・・

初登校そして出会い3

「先生、あの子が入試の時の模擬戦闘でアレックス先生を倒した子ですか？」

中年で眼鏡を掛けた教師が職員室でマイカップでコーヒーを飲みながら角刈り体育教師にそう尋ねた。

ちなみにこのアレックスと言う教師だが学生時代ボクシングの選手だったらしい。

「ええ、そうらしいですね。 私はその場に居なかつたんですが、教官をしていた二条先生が

言つてたんですが、凄かつたらしいですよ。」

角刈り体育教師が二カーと笑いながら答え

「あのアレックス先生を一発で倒したんですよ。 私も一度戦つてみたいですよ。」

と角刈り体育教師が言うと

「いや、いや先生が戦つちや駄目でしょ。 けが人がでちゃいますよ」

と、中年眼鏡教師は笑いながら答え

「まあ、そうですね。 あっはは」

角刈り教師と中年眼鏡教師の笑い声が職員室に響いた。

「おーい、じゃあみんな一席に着いて授業始めるよー」

担任の二条未来（にじょうみらい）は手に持っていた教科書を手でポンポン叩きながら教室のちよつど

真ん中にある教壇の前に立つとそれまで自分の席から離れていた生徒達が

「はい」

といいながらそれぞれの席に戻って行き全員自分の席に着くと担任の二条未来が

「授業始める前に皆にお知らせあるよー」

二条未来が笑顔で生徒達に言つと一番後ろの席座る短髪の生徒藤峰ふじみ蓮司が

「この授業前の発表ゆうたら・・・まさか未来ちゃん転校生かー？」

関西弁で短髪の藤峰蓮司が生徒が立ち上がり嬉しそうに聞くと

担任の二条未来は胸の前で腕をクロスにさせて

「はい残念。転校生じゃ無いよ。」

と答えると、関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司が少し残念そうに

「なんや〜ちゃうんかいな〜 じゃあ未来ちゃんお知らせつていつ

たいなんなん？

はっ まさか抜き打ちテストや無いやろうな？

そんなんホンマにアカンでテストなんかされたら俺絶対赤点やわ〜」

関西弁短髪男子生徒は少し青ざめた顔で担任二条未来に聞いてみると

「蓮司れんじうるさいよ。全く話が前に進まないじゃん。」

担任二条未来は呆れた顔で関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司に指摘する。

「ゴメン、ゴメン。で、未来ちゃんお知らせつていつたいなんな

ん？」

関西弁短髪男子生徒不思議そうな顔で二条未来に聞いてみる。

「えーと入学式の時からずーと空いていた席があるでしょ。ちよ

うど蓮司の前の

席今日からその席の子が来るから。」

二条未来は少し疲れた顔でクラス全員に伝える。するとまた関西

弁短髪男子生徒

藤峰蓮司は騒ぎだし

「ホンマか！！ ずーっと前の席空いとつたからめっちゃゆ気になっ

とてん。

え？まさか女の子かいな」

などと騒いでいると藤峰蓮司の生徒の隣の席の女生徒が立ち上がり「ちよつと！ 蓮司少し黙って！ 話が前に進まないじゃない。」

隣の席に座る女生徒ポニーテールで髪の色は少し淡い茶色長谷川美羽はせがえわは

隣の席に座る藤崎蓮司に指摘し

「おゝ恐まじ美羽は俺の所のオカンより恐いで」

などと言うと他の生徒達がクスクスと笑いそんな事を言われた本人は顔を真っ赤に染め

「蓮司！アンタあとで覚えておきなさいよ！！」

と言い頬を膨らまし長谷川美羽は席に着きそれを観ていた二条未来は笑いながら

「うん やっぱりいつ観てもあんた達二人の夫婦漫才は面白いよね。」

などとと言うとクラスでどつと笑いがおきそんな事を言われた二人はかなり恥ずかしそうにし

「先生！何で私がこんな奴と夫婦なんですか！」

長谷川美羽顔を真っ赤にし立ち上がり大声で言い

「そや、そや俺ももつとおしとやかな子がタイプや」

藤峰蓮司も立ち上がり反論する。

「ゴメン、ゴメン謝るから席に着いて。」

そう二条未来が言うと藤峰蓮司と長谷川美羽はしぶしぶ席に着いた。

「じゃあ、話がかかなりそれちゃったけど話戻すね。」

二条未来がそう言うのと廊下で待っている春樹に

「じゃあ志木野君入ってきて。」

そう二条未来に言われると廊下でかなりの時間を待たされた春樹は（やつとかよ。あまりにも話が進まないから忘れられてるのかと思っただ。）

そんなことを考えながら春樹は教室のちょうど真ん中にある教壇の

傍に行き

担任の二条未来の横に立つ。

「じゃあ志木野君、自己紹介よろしく。」

担任の二条未来そう言いながら黒板に春樹の名前を書き少し横にずれ春樹は

教壇の前に立ち

「えーと志木野春樹しきの ちはるです。入学の手続きでちょっと

登校するのが遅くなりましたが。今日からよろしくお願いします。

」

春樹は「ペッコ」と頭を少し下げ自分の紹介を行った。

「志木野君は海外暮らしが長くて日本に帰ってくるのも十年振りらしいから

みんな仲良くしてあげてね。」

担任の二条未来があまりにも少ない春樹の自己紹介に付けたしそう言い

「じゃあ志木野君の席は真ん中の一番後ろの席の前の席ね。」

担任の二条未来にそう言われ春樹は指示さらた席に着き持っていたかばん

を机の横に掛けた。席に着くとすぐに後ろに座る生徒から

「今日からよろしくな。俺は藤峰蓮司ふじみね れんじや普通に

蓮司と呼んでくれ。俺もお前の事春樹て呼ぶさかい。」

と言われた春樹は

「わかった よろしく蓮司れんじ。」

春樹はふつと自分の横の席を見ると空席だったので

「一つ聞いていいかな」

と後ろの席に座る蓮司に聞くと

「ええで。どないしたん？」

と蓮司が答えたので

「俺の隣の席の子は今日は休みなのか？」

春樹がそう蓮司に質問してみると

「いやー悪い 俺ちよつと分からへんわ」

蓮司は少し気まずそうに答えたので春樹が不思議そうにしていると蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女が

「私は長谷川美羽。はせがえわみう 気軽に美羽みうて呼んでね。」

春樹君つて海外から来たんだよね 何処の国からきたの？」

自己紹介をした長谷川美羽は目をキラキラさせ帰国少女春樹に質問してきた

(うーん・・・どうやって答えようかな)

と考えていると

「こらーそこお」

担任の二条未来が人差し指をピツシと春樹達の方へ向け

「その聞きたい気持ちも分かるけど、もう授業始めるからそうゆう質問タイムは授業終わってからにしてね。」

担任の二条未来がそう長谷川美羽に言うとき少し残念そうにし机に置いてある

魔法学の教科書に視線を戻す。 それを確認した二条未来は自分の手元にある魔法学の教科書

を開き

「じゃあ昨日の続きの16ページからやるね」

と担任の二条未来が言うときクラス中の生徒達も言われたページを開き教科書に目を通していき

春樹も言われたページを開き目を通していくが

(結構難しいな、俺こつという理論の話はよく分からないな)

など考えているとき突然教室の前の扉が開き担任の二条未来が「もう授業始まってよ。早く席に着いて」

と言うとき遅刻してきた生徒は

「ごめんなさい。」

と言い自分の席に向かう。春樹は目を通していた教科書から横目で隣の席を見ると

(他の席は全部埋まっていたから・・・あゝ隣の席の奴か)

と見えこちらに向かって来る生徒の方を見ると生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言つ言葉が凄く似合う少女

「冬野雪音ふゆのゆきねだった」

初登校そして出会い4

春樹の横の席の生徒は今朝登校中に出会った冬野雪音ふゆのゆきねだった。

春樹は自分の席の隣の席に座った冬野雪音に小さな声で

「今朝はどうも。一緒のクラスだったんだな。」

と言うと自分の席に座り魔法学の教科書を読みながら小さく頷いた。春樹はこれ以上喋ってまた担任の二条未来にじょうみらいにこれ以上怒られるのも嫌だったので自分の魔法学の教科書を読みながら

（彼女が入ってきた瞬間クラスの空気がちよつと変わったな）

春樹が教室を見渡すと少し気まずそうにしているが全員担任の二条未来の話を

聞きながら教科書を見ている者やノートに今聞いた話を書いている者春樹後ろの席

に座る藤峰蓮司ふじみねれんじ、長谷川美羽はせがわみづの二人

も担任の二条未来が話す内容に耳を傾けながら教科書にも目を落とす。

春樹の自分の教科書に目を通すが春樹はこういう理論の話は得意では無かったので

若干ウトウトとしながら

（あゝこういう理論の話は俺じゃなくて秋人あきひとの得意分野だからな）とか考えていると眠気の誘惑には勝てず春樹の意識が教科書から離れ意識が飛んだ。

「おい、被験体^{ひけんたい}24号」

暗い通路を歩いていると後ろからそう声を掛けられ

「……………おいお前、俺をその番号で呼ぶな。俺には春樹って言う名前がある。」

春樹が立ち止まり振り向かず声を掛けてきた男に言い返すと

「あくわりいわりい被験体24号のは・る・き君」

その白衣を着た男はニヤニヤ笑いながら春樹を馬鹿にしながらいってくる。

春樹は目力だけで人を殺せるような目でその男を睨みつけ

「……………お前……………口の利き方には注意しろよ……………それ以上言うと俺も、あいつ等も黙っちゃいない。」

春樹が男にそう言っていると春樹の事を馬鹿にしていた男が一步後ろに下が

り「おお〜こええ、こええ、そんな怒んなよただの冗談だよ。」

春樹が無視して行こうと思った瞬間に男が

「お前さんここから出て行くらしいな。良かったな外の世界だぜ。」

男がニヤニヤして言っていると春樹は

「……………どの道またここに帰って来るんだ全然良くは無い。」

春樹がそう答えると

「まあ、そりゃそうかお前さんの帰れる場所はここしか無いからな。」

男が笑いながらそう言っていると

「聞く話によるとかなり難しい任務らしいじゃねーか まあ死なない程度に頑張りな。」

男が笑いながら暗い通路の奥へと消えていった。

「……………当たり前だ。こんな事で死んでたまるか……………俺達は生きて

このクソみたいな所から出て行く。そのためにも俺はあいつを……………

……………

「こらー志木野春樹ー」

春樹はふつと目を覚まし声の発信源の方を見ると笑顔で俺の方を見ている担任の二条未来が居た。

「君ねー私の授業で居眠りするとは度胸あるね。」

担任の二条未来がこれでもかという笑顔で春樹の席の方へと歩いてくる。

だがその瞬間に一時間目の終了の合図のチャイムが鳴り響き担任二条未来は

少し残念そうに

「春樹、次居眠りしたら教育指導だからね」

担任の二条未来はその一言を残して職員室へと帰っていった。

（教育指導てただの暴力だろ てか志木野君からいつのまにか呼び捨てになってるし。）

春樹は深いため息をつくと後ろの席の蓮司が笑いを堪えるように

「春樹お前エライ怒られたな。」

蓮司は笑いを堪えられなかったようでゲラゲラと笑っている。

「俺初めて見たで未来ちゃんの前で寝てるやつ ほんま凄い度胸やで。」

蓮司がそう言うとなりの席の長谷川美羽も

「ほんとだよ。 春樹君二条先生あ見えても凄く怖いんだよ。

他のクラスの子が言ってたんだけど校内で禁止されてる魔法使つての喧嘩をしたらしいんだけどそれを見つけた二条先生が鬼の形相で走っていった

魔法使わず体術だけで喧嘩してた2人を止めたって噂もあるから春

樹君も気よつけた

方がいいよ。」

そう長谷川美羽が言うとき春樹は

「そりゃ怖いな これからは気よつけるよ。」

そんな会話を三人で行っていると春樹の席の前にクラスの生徒達が集まってきた

各々の自己紹介をしだした。

「私ゆみ夕美宜しく 夕美ちゃんと呼んでね

とか

「志木野君って外国から来たんだよね何処の国から来たの？」

とか

「志木野君って彼女とか居るの？」

とかそれぞれに春樹に言ってくる

「ちよつと待ってそんなに一斉に言われても答えられないから」

春樹は少し困った顔をしているといいタイミングで次の授業のチャイムが

なり響いて春樹の席の前にいた生徒も少し残念そうにそれぞれの席へと戻って

行き春樹は心の中で一つため息をつきふつと隣の席を見ると一時限目の授業が

終わっていつものまにか居なくなっていた冬野雪音もいつものまにか帰ってきていた。

この学校では通常の授業も行われる。その内容は普通の高校生が習うのと同じだが

この学校は一応超が付くほどの優秀校だから内容もかなり難しくこういう勉強があまり

得意ではない春樹は二時限目から四時限目の通常授業に頭を悩ました。

ようやく四時限目の終了のチャイムがなり春樹は自分の髪の毛をく

しゃくしゃとし

(まさか授業がこんなにも難しいなんて テストの時どうしようかな・・・)

とか考えていると後ろの席に座る蓮司が

「春樹、昼飯どうするんや？」

と春樹に尋ねると

「いやまだ何も考えていないな。」

そう言うと蓮司が

「じゃ一緒に食堂へ飯いこか。」

春樹は少し考え

「そうだな。」

と言い席から立ち上がり教室から出た。

食堂までは教室からすぐに付き扉を開けると結構混んでいて

「結構混んでんな」 どっか席空いてへんかな」

と二人で食堂内を歩いていると

「蓮司」

と声を掛けられ二人で振り返るとそこには金髪の生徒が手を上げている

「おおロイヤンか ちよつと何処も席空いてへんから席合い席でもかまわへんか？」

と尋ねると

「ああいいよ。」

と言うと机の上に置いてあった荷物を片付けその間に春樹と蓮司は食事を買いに行き

金髪生徒の所に戻ってくると机は片付けられていたが春樹達を待っている人数が増えていた

春樹が机に着くと

「ゴメンね春樹君何処も席空いてなかったから合い席させてもらっね。」

長谷川美羽はそう言うと胸の前で手を合わせて言ってきたので

「全然大丈夫だよ長谷川 俺達も合い席させてもらってるから」
春樹がそう言うのと長谷川美羽が少し膨れ面で

「美羽」

と一言いい

「朝言ったでしょ 美羽て呼んでって」

そう春樹に言うのと

「あゝゴメンエーと み、美羽」

春樹が少し恥ずかしそうに言うのと美羽は嬉しそうに

「うん よろしい」

そんなやり取りをしていると春樹の前に座る金髪生徒が

「俺は岡崎ロイ。 春樹宜しく。」

春樹は一つ疑問に思ったので

「日本人じゃないのか？」

と、尋ねてみると笑いながら

「ああ俺アメリカ人とのクォータなんだ。 まあ顔は殆ど日本人で

髪の色だけ受けたんだ」

春樹は納得した顔で

「なるほど分かった じゃあこれからよろしくなロイ」

とロイの前に右手を差し出した。それを見ていた蓮司が

「良かったな春樹これで友達三人目やで じゃあそろそろ飯でも食

べようや」

蓮司が今日の昼御飯のカツ丼を食べようお箸を持った瞬間

「ちよつと！お待ちなさい！」

同じ席に座っていた少女が突然立ちあがった少女はとても綺麗な金髪で

縦ロール白人特有の綺麗なブルーの瞳少女

「わたくしまだ自己紹介が終わっていませんわ」

と、お昼のカツ丼を食べようとしていた蓮司にびしっと一指し指を向け

「わたくしの自己紹介が終わるまで食事はお待ちなさい」

と、言い蓮司は不思議そうに

「なんやレイラお前まだ自己紹介してへんかったんか。えーと春樹こいつはレイラや 良し自己紹介も終わったし飯にしよか。」

蓮司は再び自分の井に手をかけ食べようとしたので

「なんでそんな適当な自己紹介なんですよ！」

と小女が怒りながら蓮司言つと

「いやあでもはよ食べな御飯固なってまうで。」

と蓮司が言つので小女は

「はーもついいですわ 先に食べてくださいな。」

と蓮司に言つと

「じゃ先に食べさせて貰うわ。」

と自分の井に入っているカツ丼を食べだした。

春樹、美羽、ロイは完全に食べるタイミングを無くし小女が

自己紹介を始めるの待っていると言蓮司の方を見ていた小女が

こちらに振り返り右手を腰に当て

「わたくしレイラ・ハーゲンボルトですわ。 イギリスの貴族

ハーゲンボルト家の次期当主ですわ。」

と、自身たつぷりに自己紹介を行ってきた。すると横で一人

お昼を食べていた蓮司が食べるのを止め

「なあレイラお前がようゆうとるハーゲンボルト家って言うのは

一体なんなんや？」

と言つと春樹、美羽、ロイの三人は呆れて

「あんだ、本当に知らないの？」

と美羽が呆れて聞き

「蓮司僕でもハーゲンボルト家は知ってるよ」

とロイも呆れ

「そんなん言われても知らんもんは知らんからな。 春樹お前は知

ってるんか？」

と春樹に尋ねると

「当たり前だ。 勉強が出来ない俺でもそれくらいは知ってる。」

春樹も呆れて言うと

「まじか皆知つとるんか・・・」

と、少し寂しそうに答え

「それでハーゲンボルト家っていうんは何や？」

と、蓮司が言うとレイラは少し嬉しそうにし説明しようとした瞬間
春樹が

「ハーゲンボルト家って言うのはイギリスの五大貴族の一家だよ。」
春樹が答えると前に座っていたレイラが

「なぜあなが説明するんですか。」

と、ちよつと怒りながら言っているが春樹はさらりと流し話えお続
ける。

「イギリスの女王エリザベスを守る五枚の盾、ハーゲンボルト家は
その中

の一家だよ。」

と、説明するとレイラも納得したかのようにうんうんと首を頷いて
いる。

「と、言うことはレイラお前貴族やったんか！」

蓮司はカツ丼を食べる事も忘れてびっくりしているようだ。

「そうですね。 わたくしは絶対にこの学校を卒業して女王陛下を
守れる

様な強い騎士になります。それがわたくしの夢ですわ。」

と、レイラは満面の笑みを浮かべ春樹達に語った。

「じゃあ俺も自己紹介しとくか 俺の名前は志木野春樹だレイラよ
ろしくな。」

春樹が笑顔でレイラに言うとレイラは少し恥ずかしそうにし

「こちらこそよろしくお願ひしますわ。」

それをみていた美羽が

「良かったねレイラ春樹君と友達になれて。」

と、言い

「レイラ休み時間とかもずっと春樹君の喋りたそうだったもんね。」

と、言うとレイラは顔を真っ赤にして

「み、み、美羽なんて事をいってますの　そ、そ、そんなわけありませんわ。」

と、言うと美羽はくくと笑い

「あれーそうだったけ」

と二人でやりといをしているの横目に春樹とロイは完全に伸びたラーメンを

食べる。すると予鈴のチャイムが食堂に鳴り響き他の生徒達も教室へと戻って

行くので春樹達も教室に戻るため自分達が座っていた机の上を片付け教室に

戻ろうと思ったとき春樹がふっと思い出し

「そういえば日本にも魔術師の有名な一族があったよな。」

と、言うと

「いや俺は知らんわ。　じゃあ急ぐから先行くわ」

と蓮司、美羽、ロイは先に教室に戻っていった。残された春樹とレイラは

不思議そうに顔を合わせ少し考えたあとで教室に戻って行った。

初登校そして出会い4（後書き）

今回は少し長めになります

初登校そして出会い5

昼食が終わり午後最初の授業は魔法の歴史の授業で春樹はこの手の授業も得意では無いので

全く授業に関係無いページをペラペラとめくったりしていると、昼食後と言うこともあり

急激な眠気に襲われふっと気づくと授業も終わり次の授業の為の準備を行っていた。

(うん？ なんだ移動授業か)

と、覚醒したばかりの頭で考えていると春樹の後ろの席に座る蓮司れんじが春樹の右肩を

ポンと叩きながら

「春樹お前授業中ずっと寝とったな」

後ろの席に座る蓮司がニコニコした顔でそう言ってきたので

「ああ 俺昔からこういう頭の使う授業は得意じゃないんだ」

春樹は寝起きの顔で頭を掻きながらそう言つと

「まあ別に俺はええねけどあんま授業さばつとたら指導受ける破目になるぞ」

蓮司がそう言つと蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女長谷川美羽も

「そつだよ、春樹君この学校そついつの結構厳しいから度が過ぎると退学もあるから気よつけてね。」

と美羽が少し心配そつな顔で言ってきたので

「ああ これからわ気よつけるよ。」

春樹はそつ笑顔で言つと美羽は顔を少し赤くし下を向きながら

「まああわかつてるなら いいんだけど。」

そう言うと美羽はそそくさと教室から出て行ってしまった。

春樹と蓮司は

「なんや あいつ」

「さあな」

と二人で言っていると蓮司が何かを思い出したようで

「そや次の授業移動授業やねん」

そう言うと蓮司が移動授業の準備をしだし

「春樹はよう準備せえよ」

蓮司あ荷物を持ち教室から出ようとしたので

「待て、蓮司次の授業てなんだよ？」

そう言うと教室から出ようとしていた蓮司が立ち止まりこちらに振り返り

「何をゆうとんねん 朝のHRの時未来ちゃんゆうとったやん」

蓮司がそう言うので春樹は少し考え

「何が？」

と、春樹が不思議そうに言うと言蓮司が呆れた顔で

「次の授業は魔力検査と身体能力検査やぞ」

と、蓮司が言う

「……あゝ魔力検査ね」

「魔力検査」

と、は入学して一番最初に受けるテストであり、主に潜在魔力検査、属性魔力検査、身体能力検査

の三つに分けられる。

「潜在魔力検査」

とは自身の中にどれだけの魔力があるのかを検査する物でこちらの検査結果は生徒に

は説明される事はない。

「属性魔力検査」

基本使用できる属性は一つでありこの検査で得られた情報で自分の属性を鍛えていくことになる。

「身体能力検査」

現代の魔法は魔法結晶石まほうけっしょうせきを使い魔術を使うので弾切れの状態になる事もあるののでいざ戦闘の時近魔術を使わない近接戦闘も行える様に主に体力検査などが行われる。

主にこの三つの検査に分けられこのテストであまりにも低い数値を出してしまうと退学になる事もある。

「春樹そんなぼーっとして授業遅刻してもうたら未来ちゃんに雷落とされまう急ぐぞ」

と、言うと蓮司は教室から出て行ってしまったので

「はあゝ魔力検査とかイヤだな」

と、ぶつぶついいながらも春樹を教室から出て蓮司の後を追いかけた。

「おい蓮司待てって 俺何処でテストするとかしらないんだから。春樹が走りながら蓮司の後ろからそう言うと蓮司は走りながら

「えーとつなテスト受ける場所は入試試験の時に模擬戦闘のテスト受けた場所や」

と、蓮司が言うと春樹は同じく走りながら考え

「ああゝあそこか」

と、言うと春樹は突然蓮司とは別の道へ行き

「おい、おい春樹お前どこへ行くんや」

と、蓮司は叫んでいるが春樹は無視し

「階段から言った所で絶対に間に合わない。　だったらショートカ
ットだ。」

春樹はそのまま走り渡り廊下に着くと他の生徒もいたがそれも無視
しそのまま

の勢いで二階から飛び降りまるで何事も無かったかの様にそのまま
走り抜ける

それを観ていた生徒達は

「へ？今のなに？」

女生徒が隣にいた女生徒に聞くと

「・・・イヤわかんない。」

二人の女生徒達は啞然としている。　まあその通りである。　いきな
り男子生徒が走って

きてそのまま二階から飛び降りたのだからそれはビックリするだろう

春樹はそのままの勢いで走りすれ違う生徒達には驚きの目で見られ
るがその視線を無視

し春樹はギリギリで検査が行なわれる部屋にたどり着いた。

春樹がぜえぜえと肩で息をしていると春樹に気が付いたロイが近づ
いてきて

息が上がっている春樹をみて不思議そうに

「春樹なんでそんなに検査の前からばててるの？」

そんな事を聞いてきた春樹は心の中で

（こいつこんなにバテバテになったのはお前らのせいだろ）

と、ロイに言っつてやるうかなと思っつたがそこはグツと我慢しその言
葉を飲み込み

「いや間に合いそうになかったからちょっと走ってきた」

と、言うとも明らかにばてている春樹の姿をもう一度見て

「そっかそっか春樹は面白いな」

と、ロイが笑いながら言っつてきた。　春樹は心の中で

（全く笑い事じゃないんだがな）

と、思っつているとロイが

「そういえば春樹、蓮司はどうしたの？」

と、ロイが春樹に聞いてきたので春樹は少し考え

「さあ俺は遅刻しそうになったから走ってきたからな 蓮司は知らないな」

と、春樹が答えるとロイは

「ふーんそつか蓮司ついていないな二条先生に怒られるよ」

と、ロイはそう言うと蓮司が二条に怒られるシーンを想像したのか手を口に

持っていていき一人で笑っているおそらくこの会話を聞いていなかった人間が見ると

かなり怖いだろつ金髪の男子生徒が一人で笑っているのだから

「そういえばロイ検査ていうのは制服のままでもいいのか？」

と、一人で笑っているロイに聞くと

「え？ああ身体能力検査の時は着替えるけど魔力検査の時は制服で大丈夫だよ。」

まだ顔は笑っているがそうロイが言ってきた。

春樹は

「ふーん」

と、答え周りをクルット見回し他の生徒を見ると金髪縦ロールの少女レイラと

目が合い春樹は目をそらすと金髪縦ロールのレイラがこっちに歩いてきて

レイラお得意のいつものポーズ左手を腰に当て人差し指をこちらへピシット

向け

「ちよつと！何で目をそらしますの？」

と、春樹の前に立ち少し怒った顔でそう言ってきた。

「いや、目をそらしたわけじゃない。」

と、春樹が答えるとレイラはまだ不満があるのかまだなにかぶつぶつ言ってくる。

春樹は「はぁー」と、ため息を付くと覚悟を決めレイラに二条が来るまで永遠と

ぶつぶつと言われ続けた。

二条が部屋に入ってきてきて検査の説明をしていると息を切らした蓮司が部屋に入って

きて二条に

「蓮司これで遅刻2回目だから今日検査終わったら指導室行きね。」

と、二条に言われ蓮司は呆然としていた。

それを見ていた春樹は

「蓮司すまない」

春樹は小さな声で蓮司に謝った。

初登校そして出会い5（後書き）

少し更新が遅れました

魔法力検査と模擬戦 1

担任の二条未来に指導室行きを言い渡され最初こそは呆然としていた蓮司れんじ

だったのだが直ぐに立ち直り今は春樹の横でブツブツと小さな声で文句を言っている。

「春樹お前一人だけ助かりよって。 あんなもん裏切り行為やぞ。」
蓮司が春樹にそう言っていると春樹は表情を変えず担任の二条の方を観ながら

「何が裏切りなんだ。」

春樹が二条の話を聞きながら小さな声でそう言つと

「何がって・・・よお言うは自分一人だけ助かって俺一人だけ指導室行きやで」

自分でそんなことを言つてまた肩を落としている。それをみた春樹は一つため息を付き

「はあー。わかったよ今度何か奢るからそれで許してくれ」

春樹が蓮司にそう言つと今まで肩を落としてた蓮司がこちらをちらちらと見て

「ほんまか？」

と、さっきまで肩を落として呆然としていた蓮司が少し嬉しそうにして言ってくる。

「ああ本当だ。その変わり安いランチだけだからな。」
と、蓮司に言つと

「わかった。しゃあなしそれで許したるわ。」

春樹は現金な奴だなと思つたが声に出さずまた一つため息をついた。蓮司の文句も一段落し二条の話を聞こうと思ひそちらへ耳を傾けた

がどうやらもう話が

終わりそれを聞いていた生徒達も検査の準備を行っていた。

「じゃあ最初は「潜在魔力検査」せんざいまりよくけんさからだから皆こっちに来て。」

担任の二条に言われ全員二条に付いて行くと広い部屋に全員入れられるとそこには

巨大な魔法結晶石まほうけつしよせきがあった。

普通魔道師が持っている魔法結晶石は小石程度の大きさなのだがここに

ある魔法結晶石は岩位の大きさであった。全員が呆気に囚われていると二条が

「じゃあ皆この魔法結晶石に一人ずつ手を触れていってそれだけで潜在魔力検査は

終わりだから。」

と、二条が言っていると前で聞いていた生徒達から順番に触れていく春樹は一番後ろで聞いていた

ので春樹は一番最後に巨大な魔法結晶石に触れる。そうすると何かに自分の中を見られる

様な感覚に襲われたがすぐに終わり時間にしたら約10秒位だった。最後の春樹の検査が終わると

二条が

「じゃあ全員魔法結晶石に触れたよね。じゃあ次は「属性魔力検査」ぞくせいまりよくけんさだから付いて来て。」

と、二条は言っていると巨大魔法結晶石だけ置いてある部屋を後にする。

その部屋から出ると次はすぐ隣にある部屋に連れて行かれ

「じゃあこの部屋では君たちの属性を検査するから。じゃあ検査の前に

これを皆に渡すね。」

と、二条が全員に言っていると先き程から持っていたアタッシュケースを床に置き

なにやらパスワードみたいなのを入力をする。するとアタッシュ

ケースは

「カチャ」という音を出し開くするとその中から大量の魔法結晶石が入っている。

「じゃあ皆良く聞いてね今から渡すこの魔法結晶石は在学中に紛失とかしても

代わりが無いから絶対に失くさないようにもし失くしたら退学だから。

気おつける事。」

と、二条が説明を終えると生徒一人、一人に魔法結晶石を手渡してくる。

それが全員に渡ると二条は

「じゃあ今から属性検査するから皆集合して。」

と、二条が言つとそれまで今渡された魔法結晶石を貰って喜んでいた他の

生徒達も二条の元に集まってくる。

「じゃあ検査の前に魔法技師の赤峰あかみね技師を紹介するね」

と、言つと一人の女性が部屋に入ってきた。その女性は黒髪ショートに

眼鏡をかけ身長はおそらく170cmはあるだろう年は見た感じ20代

後半くらい二条に比べたらかなり大人っぽい

「えーと今二条先生に紹介された赤峰です。一応この学校専属技師

です。 皆さんよろしくお願いします。」

と、深々とお辞儀をしてきた。そのあまりにも深々ちしたお辞儀だったので

何人かの生徒は釣られてお辞儀をしている。

「じゃあ皆今から属性検査するね。 じゃあ赤峰さんここからはお願いします。」

と二条が言つと魔法技師赤峰が全員の前に立ち

「じゃあ皆さんの魔法結晶石に皆さんの魔力を魔法結晶石に変換しますので

こちらに一人ずつ並んで下さい。」

と、赤峰が言うると他の生徒達が一列に並んでいく春樹がその列の一番最後に並ぶと

一番前の生徒から属性検査が行われていく。

ちなみにこの「魔法技師」とは現代魔法は魔法結晶石が無いと使えない為自身の

魔力を魔法結晶石に変換する必要がある。だがこの変換作業は個人が簡単に使う

事は出来ず専用に魔法技師の元に持って行く必要がある。

魔法結晶石の変換を待っていると最初に変換作業終えた長谷川美羽はせがわみづが俺の前に

来て

「あ、春樹君聞いて聞いて私の属性風だったんだ。」

美羽が嬉しそうにそう春樹に言うってくる。ちなみに風属性と言うのは全然

珍しく無い。春樹が「おお良かったな」と、答えると「いいでしょ。羨ましい

でしょ」と、満面の笑みで言うってくるが適当に「ああ」と、言うておいた。

美羽の自慢話が終え順番を待っていたら次はロイが春樹の前に来て「あ、いい所にいた春樹聞いてくれ俺の属性水だったんだよ」

と、ロイが美羽の同じテンションで言うてきた春樹は美羽の時みたいに

適当に答えた。

また、順番を待っていた春樹の前に次は蓮司が現れ

「お、春樹やないか、聞いてくれ俺の属性火やってんええやる。」
蓮司が自慢げに言うてきたがまた同じく適当に答えた。

次は金髪ロールのレイラが現れ左手を腰に当て右の人差し指をこち

らに
向け

「あ、春樹さん聞いて下さい。わたくしの属性雷ですわ。このわたくし

に一番合う属性ですわ。」

レイラがブルーの瞳をキラキラさせ春樹に自慢してくる。春樹は適当に

答えたがどうやらそれがばれたらしく

「なんですのその適当な返事は」

レイラがぶつぶつと文句を言ってきた。その時前でなにやら歓声が上がった

春樹が何だと思って前を見るとそこには冬野雪音ふゆのゆきねが居た。

何があつたのかと前に並んでいたクラスメイトに聞くと

「え、なんか冬野さんが属性変換したらしいんだけどなんか見た事の無い

属性だったの。」

と、前に居た女生徒が答えた。

「それはいつたいどんな属性だったんだ。」

と、春樹が女生徒に尋ねると

「えーと氷の属性だったらしいよ」

と、答えたその答えに春樹は

（氷だと・・・と言う事は日本が誇る四季の一族か・・・それだったら

納得がいくな。）

「四季の一族」

とは日本の最古の魔術師の一族である。その使用する魔術は一族のみに伝わる

魔術であり他の者は一切使用する事は出来ない。

春樹が難しい顔で考え事をしていると

「志木野君 志木野君」

と、呼ばれ

「あ、はい」

と答えると春樹の前にはもう誰もいなく次は自分の番だった。

春樹が赤峰の前行くと

「じゃあ、あなたが最後ね志木野君魔法結晶石に魔力を込めてみて」

と、言われた春樹は魔法結晶石に魔力をこめるとバチバチといいだし

「志木野君の属性は雷ですね　じゃあこのまま魔法結晶石に変換するから

ちよつと待って下さいね。」

赤峰がそう言っていると作業をしたので春樹は赤峰の方を見ながら

(作業はかなり早いな、ランクは二条と同じ位か・・・)

と、考えていると

「はい。完了しました。どうぞこれが志木野君の魔法結晶石です。」

と、言われ魔法結晶石を渡されたので春樹は

「ありがとうございます。」

と、一言だけ表情を変えずお礼を言った。それを赤峰の後ろで見ていた二条が

「じゃあ皆変換作業終わったよね。　まあ皆はこれから二年間は赤峰さん

にお世話になると思うからちゃんとお礼言っとく事」

と、言われた赤峰は赤面し

「いやいやいいですよえーと皆さん私は学校校内の6番地区でお店出して

ますので補充の時とかはよろしくお願いします。」

赤峰はそれだけ全員に伝えると部屋から出て行った。

「じゃあ皆最後の検査に行こっか、最後の検査はここじゃなくて外でやるから

付いて来て。」

二条はそお言い全員二条の後を付いて行くとグラウンドの方へと向かった

どうやら次の検査はグラウンドで行うらしい
グラウンドに付くと二条の説明が始まった。

「えーここでは普通の高校と同じで皆には今から100mを全力
で走ってもらうね。」

とりあえず皆の体力が今どれだけあるかの検査だから。 まあまだ
色々検査も残ってるん

だけど今日は時間もあまり無いからこれで最後」

と、二条が言うとそれを聞いていた女生徒達が

「先生私達スカートなんですけど」

と、言う最もな反論が出てきた。それを聞いた二条は

「先男子の方からするから女子は着替えてきて。」

と、二条が言うと

「わかりました。」

と、言い女子達は着替えに教室へと戻って行った。

「じゃあ男子から走ってもらうね。」

二条はストツプウォッチを出しスタートラインへ行くと

「時間も無いし五人ずつでお願いね。」

と、言われた男子達は全力で走って行った。そして最後の

走者は春樹、蓮司、ロイ、の三人だったので蓮司の思いつきで

一番遅かった奴ジュースおごりという新ルールが作られ負けるのが

いや

だった春樹は少し本気で走りゴールするとかかなりの好タイムだった
らしく

おおーと言う声が上がった。 ちなみにこの賭けの敗者は蓮司で春

樹、ロイ

にジュースをしぶしぶおごっていた。

今日の検査が全て終わり寮に戻り夕御飯を済ませ自分の部屋に戻り
明日の

準備を行いふつと思い出し春樹は制服のポケットにいれぱなしだつた魔法結晶石
を取り出し少し眺め自分の机の上に置いた。その傍には別の魔法結晶石が二つ置いてあつた。

魔法力検査と模擬戦1（後書き）

ここにきてやっと魔法が出てきます。

まだ使用はしませんが・・・

魔法力検査と模擬戦2

検査が終わり生徒が全員帰宅し担任の二条未来は潜在魔力検査の結果を職員室

で待っていた。二条が自分の席に座りコーヒーを飲んでいると二条の元に中年

の眼鏡をかけた教師がきて自分の席で難しそうな顔でコーヒーを飲んで

に話かけてくる

「二条先生どうでした？検査の方は収穫ありましたか？」

と、その中年の教師もコーヒーを飲みながら二条に問いかけると

「あ、斉藤先生お疲れ様です。一応今検査結果待ちなんですけど私がみた感じでは中々の子が多かったですね。」

二条がそう答えると中年教師斉藤は興味深そうに

「ほおーまあ今年の生徒達は豊作ですからね。先生の所にも将来が楽しみな子達が

たくさんいますしね。」

中年教師斉藤が自分のあごを触りながら言う

「えーとイギリス貴族の名家ハーゲンボルト家、関西で有名な大峰家そして日本

が誇る四季の一族冬野家凄いですよね他にも将来楽しみな子がいますしね」

と、斉藤が言うと、二条少し嬉しそうに

「そうですよこれからが凄く楽しみです。でも一人だけ全く読めない子が

いるんですよ。」

二条がそう言う。コーヒを飲んでいた斉藤が飲むのを止め
「先生それは誰なんですか？」

斉藤がそう聞くと二条は
「今日から登校してきた。志木野春樹なんですけど。何か一人だけ違うん

ですよ。大人びてると言うか凄く冷めているというか属性検査の時も

自分の属性が分かった時も無表情なんですよね。なんか最初から自分の属性

が分かっていた様な感じだったんですよ。」

と、二条が言うと

「あゝ彼ですか模擬戦でアレックス先生を倒したって言う子ですよ。ね？」

の中年教師斉藤が聞くと

「ええ、そうです。アレックス先生を模擬戦で倒した子です。」
と二条が言うと

「凄いですねもしかしたらかなりの大物になるかもしれないですよ。」

と、中年教師斉藤が言うと二条は

「そうだといいんですけど・・・。」

二条は少し不安そうに言った。

「あ、二条先生潜在魔力の検査届いてますよ。」

中年教師斉藤が言うと二条は届いたばかりの書類に目を通していく。その内容は今日検査を受けた生徒達の潜在魔力の数値が書かれてる。

二条がその内容に目を通していく。

その姿を見ていた中年教師斉藤が

「どうですか二条先生内容は？」

と、書類に目を通す二条に尋ねる。

「そうですねやっぱりレイラと雪音は凄いですねこの年でこれだけの潜在魔力将来楽しみ。」

と、二条は嬉しそうに書類に目を通していたが急にその手が止まる。
「……………何これ 斉藤先生ちよつとこれ見て下さい。」
と、かなり驚いた二条に言われた中年教師斉藤は二条に手渡された書類に目を通す

「これどう思います？」

二条が中年教師の斉藤に聞くと

「……………こんなの初めて見ましたよ。何ですかこれ測定不能って。」

中年教師の斉藤もかなり驚いた顔をしている。

「こんな事つてあるんですかね？」

二条がかなり驚いている斉藤に聞くと

「いやぁー私にも分からないですね。とりあえずこの件は私の方で教頭

先生に回しときます。」

と、中年教師の斉藤が言うと二条は少し不安そうな顔をして

「わかりました。この件は斉藤先生にお任せします。」

と、言うと二条は書類を斉藤に手渡した。

朝春樹が目覚めると嫌な夢を見たせいか寝汗がビッシヨリであった。

「……………また昔の夢か、朝から気分が悪い」

春樹ははうんざりした顔をするとシャワーだけ浴びて学校へと向かって行く

昨日は遅刻したので今日は時間に余裕を持ち昨日より早い時間に寮を出て行く

学校へ行く通学路の途中で昨日冬野雪音にあつた場所を通つたが今

日は昨日より

早く出たためか冬野雪音の姿は無かった。

春樹が学校に着き教室に行くと昨日より30分以上早く着いたのだ

がもう半数以上

の生徒達が来て自習や仲のいい者どうしで集まり雑談等を行っていたので春樹は黙って

自分の席に着いた。春樹は今日見た夢の内容がうんざりな内容だったので朝からピリピリ

していた。だが全く空気を読まない蓮司は休み時間に話しかけてくる春樹は適当に話を

流していくだが今朝の夢の事を考えているとどんどんイライラしてくる。

午前中の授業が終わり昼食の時間になると春樹のイライラもかなり解消されていて

昨日と同じメンバーで昼食を食べていると長谷川美羽が春樹に

「ねえ春樹君今朝何かあったの？」

長谷川美羽がおそろおそろ春樹に聞いてくる。

「うん。何で？」

春樹がそう美羽に聞くと

「なんか朝から春樹君ピリピリしてたから何か話しくから。」

と、美羽が言ってきたするとレイラも

「そうですね。このわたくしが朝から話かけても適用に返事されませんでしたわ。」

と美羽とレイラに言われた春樹は

「二人ともゴメン。今日昔の嫌な夢見て少しイライラしてた。」

春樹が素直に謝ると美羽とレイラはまさかこんなに素直に謝るとは思っていた

なかったので美羽が右手をブンブン振りながら

「う、うんうん全然いいよ。」

と、言いレイラも

「そ、そうですね。そんなに謝らないで下さい。」

と、言う二人は赤面しながら食事を続ける。すると横に座っていた蓮司が

「春樹いやな夢ってなんやったん？」

そんな事を蓮司が聞いてくる。春樹は少し黙り

「……昔の夢だよ。昔のな……」

春樹が少し神妙な顔で言うとその話を聞いていたロイが

「まあ、蓮司いいじゃない人には喋りたくない事もあるしさ。」

ロイがそう言うと蓮司は

「まあ、そおやな。」

と、言うと蓮司は食事の続きを始めたので全員で昼食の続きを行った。

昼食が終わり教室に戻り午後の授業が始まった。

今日の授業も眠気を誘う内容であり春樹はうとうとしているうちに授業が

終わり他の生徒が移動の準備をしたので春樹も立ち上がり蓮司とロイの

三人で昨日検査が行われた部屋へと移動した。今回は早く教室も出たので

走って行く事もなくゆっくりと部屋へと向かった。移動中にロイに

「春樹、授業中いつも寝てるね。あまり寝てばかりいると本当に危ないよ

しかも春樹あんまり勉強得意じゃないよね。テストの時点数取れないと留年の

可能性も出てくるから。」

とロイが心配そうに言うてくる

「まあ確かに俺は勉強は得意じゃ無い。だがテストの時はどうにかするから

大丈夫だ。」

春樹が自身満々で言うてきたのでロイは

「まあ春樹が大丈夫って言うんだったらいいけど。」

ロイがあんまり信用して無さそうな顔で言うがあまりに春樹が自信満々だったの

で話を切り上げた。

昨日の広い部屋に着き担任の二条が現れ今日の授業の内容の説明を行う

「今日は皆に魔装具まじゅうぐの話をするね。」

二条がいつもの笑顔で話しを進める。

「魔装具って言うのは現代の魔術、魔法結晶石だけじゃ使用する事は出来ない

から魔装具を媒体にして使用するの。まあ魔装具って大袈裟な名前だけど

魔法結晶石を使わなかったらただの武器なんだけどだから皆が一番使いやすい

魔装具を見つけないきゃ駄目なのちなみに私の魔装具はこれ。」

二条がそう言うと言つと自分の内ポケットから銃を取り出した。

それを見た生徒達は

「おおー」

と、言う声が上がっている。その中で春樹は二条の銃を見て分析をする。

（あれはベレッタが少し改造されてるが確かあのモデルは装弾数は15発って

所か。）

春樹は色々分析していると二条が話しを続ける。

「じゃあ今から魔装具のサンプル見せるから付いて来て。」

二条が部屋から出てすぐ隣にある部屋に行くとその部屋はまるで武器庫の様な

部屋であった。

「じゃあ皆この中で自分が一番使いやすいと思う魔装具を探してね。ちなみ

に全部レプリカだから使用は出来ないから。」

と部屋の真ん中に立ち説明を行う

「じゃあ目ぼしいのがあったら魔装具の前に番号があるから控えて

おいてね。」

と、言つと生徒達はそれぞれに散らばって行く。春樹達も色々と見ていく

蓮司、ロイはかなりテンションが上がりまるで子供の様にはしゃいでいた。

「なあロイお前どんな魔装具にするんや？」

と、かなりはしゃいでいる蓮司はロイに尋ねる

「そーだな。僕はやっぱり拳銃かな昔からアメリカで使ってたし。蓮司は

どんなのにするの？」

と、答えると、蓮司は色々キョロキョロしながら

「うーんやっぱり俺はこれかな。」

蓮司はかなり悩み拳に付けるナツクルのサンプルを持ってきた。

「そつか蓮司はそれが一番似合うよ。」

と、ロイに言われ蓮司はかなり嬉しそうにし

「そーやるやつぱ男は拳やで。」

蓮司はかなり男臭い事を言うすると蓮司は春樹の方を見ると

「春樹はどれにするか決まったんか？」

と、興味なさそうにしていた春樹に聞くと

「そーだな取り合えずこれかな。」

春樹が選んだのは日本刀であった。すると蓮司は

「ふーんめずらしいなこのご時勢に刀とは今時使ってる奴も少ないぞ。」

蓮司が言うことは正しいヨーロッパの方では未だに騎士の制度もあるので

使う人間は多いが日本では日本刀より拳銃の方がポピュラーな武器になつている

ので使用する人間は殆どいない。

「まあ俺は銃はあんまり得意じゃ無いからこれでいい。」

春樹がそう言つと周りを見ると他のクラスメイトもほぼどの魔装具に

するか決まったらしく担任の二条に番号がかかれた紙を渡していたので

春樹達も番号の書かれた紙を渡すと担任の二条が

「じゃあ皆全員決まったよね。多分明日のこの時間には渡せると思うから

明日は魔装具を使った授業もするから皆予習だけしといてね。じ

ゃあ今日の

授業は終わりだから各自解散。」

と、言つと二条は集めた髪を持って部屋から出て行った。春樹達

も教室に戻り

寮へと帰っていった。

寮に着き春樹が部屋でゆっくりしているといきなり扉を叩かれドアを開けると

そこには蓮司とロイが立っておりじゃ今から明日の復習三人でやると言つ事に

なり深夜まで付き合わされる羽目になった。終わった頃にはもう

へトヘト

だったのでそのまま眠りにつく。

(春樹、最近楽しそうだね。)

「そーか？」

(うん。最近見ててそう思うよ。そう思うよね夏陽なつひ」

(秋人の言う通りだ。いいのか春樹あまり仲良くしすぎるとお前が辛いだだけだ。)

「分かってる。」

(僕は高校生をする為にここにいる訳じゃない。目的の為にいるんだ

春樹それを忘れないでね。)

「……あぁ」

そして夜が更けていった。

魔法力検査と模擬戦2（後書き）

ここまでいかがでしょうか。初めての作品になるので、ちゃんと作品として成り立ってるのか心配になっています。

魔法力検査と模擬戦3

今日の目覚めは昨日とは違い、かなり目覚めが良く清々しい気分になった。

春樹は昨日と同じくらいに寮出て学校へと向かう。

その途中で冬野雪音ふゆのゆきねと、出会った桜並木の下を通るが

今日も冬野雪音はその場所には居なかった。

(・・・桜も、もう終わりだな。)

春樹はもうほとんど散ってしまった。桜を見上げなら学校への道を歩いた。

春樹が校庭を歩いていると、後ろの方から

「あつ春樹君。」

と、春樹を呼ぶ声が聞こえたので春樹が立ち止まり後ろへ振り返ると

長谷川美羽が手を振りながら春樹の下に走ってきて

「春樹君おはよ。早いね朝来るの。」

と、長谷川美羽に言われ

「ああ、美羽おはよ。まあ初登校の日遅刻したからなこれ以上二条に

怒られるのもイヤだからな。」

と春樹は苦虫を潰したような顔をする

「まあそうだよ。二条先生怒ったら怖いしね。」

長谷川美羽はそう言いながらクスクスと笑う。

春樹と長谷川美羽が二人で歩いていると急に

「あつそうだ。春樹君携帯の番号交換しようよ。」

と、長谷川美羽が自分の携帯を取り出したので

「ああいいよ。」

と言うと春樹も自分の携帯を鞆の奥から取り出した

「じゃあ赤外線で送るから。」

長谷川美羽とアドレスを交換を行った。すると長谷川美羽は小さくガッツポーズし

かなり小さな声で

「やった。電話番号ゲット。」

かなり嬉しそうに言った。それを見ていた春樹は

「美羽いったいどうしたんだ？」

春樹が不思議そうに長谷川美羽に聞くと

「う、うんうん何でもないよ。」

長谷川美羽が顔を赤面しながら右手をブンブン振りながらそう言う。

「うん？変な奴だな。」

と、顔を真つ赤にした長谷川美羽と春樹は二人で教室へと向かった。教室に着くき春樹がぼーっとしてしていると教室の後ろのドアが開き金髪巻き髪のレイラが

「あら、春樹さん。早いですのね。」

と、言いいながら春樹の席の横に立つ

「うん？ああレイラかおはよ。」

と、春樹が言うと

「あ、ええ、おはようございます。」

レイラが意外そうな顔でそう言う。

「なんだよ。レイラその意外そうな顔は。」
と春樹が言うと

「いえ。まさかそんな素直に挨拶が返ってくるとは思っていなかったのよ。」

と、レイラが言うと春樹は少し呆れた顔で

「なんだよそれ。俺だって挨拶位する。」

と、春樹が言うと

「まあ、そうですね。」

と、レイラが言うと自分の席へと着いた。

(いったいなんだったんだ。)

春樹が自分の席で今のを考えているとHRの始まりのチャイムが鳴り担任の二条が

教室に入ってきた。二条は出席簿をパンパン叩きながら教壇に立つと今日の授業

内容の説明を行う。

「じゃあみんな今日は一日魔法学の授業だから覚悟してね。」

二条は満面の笑みを浮かべながら話を続ける。

「じゃあこのHR終わったら前渡した魔法結晶石持って昨日の部屋に皆来てね。」

と、二条はかなり短いHRを行うと教室を後にした。

春樹は荷物をまとめて教室から出ようとすると朝から元気な蓮司が

「ちよつと春樹待てよ。」

蓮司が教室から出ようとしていた春樹を呼び止める。

春樹が蓮司の方に振り返り

「うん？なんだ。」

と、春樹が答えると

「春樹お前なあ親友置いて行くとは何事や。」

と、蓮司が言う春樹は少し考え

「・・・俺達親友だったのか？」

と、春樹が答えると蓮司は頭を抱えながら

「お前、ホンマ冷たいなロイやつたら喜んでくれるで。なあロイ。」

と、蓮司は横に立っていたロイに急にふるとロイは少し困惑した顔で

「え？あ、ううんそうだよ。」

と、ロイはいきなりなんで僕に言うのぉって顔をで答えた。

春樹はこのままではこな話がいつまでたっても終わらないと思い。

「蓮司、ロイ早く行くぞ。遅刻したらまた二条に怒られる。」

と、言い春樹は歩き出す。その後ろを蓮司とロイが

「おい。ちよつと待ってくれよ。」

と、言いながら後を追いかけてきた。

指定された部屋に着くと二条がもう部屋に居て授業に準備を行っていた。

「関心、関心誰一人遅刻者無し。　じゃちょっと早いけど授業始めよっか」

と、言いながら説明を続ける。

「じゃあ最初に「魔装具まそうぐ」渡すね。　えーと今から名前呼ぶから呼ばれたら前に来てね。」

と、二条が言うと一人ずつ生徒を呼んでいく

「じゃあ次春樹前に来て。」

二条に呼ばれ前に出て魔装具を受け取る

「春樹が選んだ魔装具扱い難しいと思うけど頑張ってるね。」

と二条に言われた春樹は

「まあ努力します。」

と、一言だけ言うつと右手に魔装具を持ち後ろに下がった。

「じゃあ皆に渡ったよねじゃあ今日の授業の説明するね　今日は魔術も使うから

ふざけないで聞いてね。」

二条が真剣な顔で続ける

「魔術は危険な物だから簡単に人を傷つける事も出来るし人を殺める事も出来る

だから皆その事を忘れないでね。」

と、真剣な顔で話をしていたが

「じゃあ皆今から私が今から魔術使って見るから良くみてね。」

二条が内ポケットから愛銃のベレッタを取り出し右手に持ち魔法結晶石を左手

に持ち魔法結晶石をベレッタの上にかざすと魔法結晶石が光ベレッタの中に消えていく

「はい、これで完了。じゃあ一回見せるから」

と、二条が言うと銃口を壁に向ける。

「じゃあまずは通常弾。」

と、言うと壁に向け引き金を引く

「バーン」

と言う音を鳴らし壁に着弾し壁に穴を開ける。その音を聞いた

数人の生徒が驚いている。

「じゃあ次は魔術弾を撃つから。」

と、二条が再び構え壁に向けて撃つ

「バーン」

先ほど同じように壁に当たる先ほどに通常弾は壁に穴を空けた。

だが今回ののは

壁がズタズタに引き裂かれている。

(この壁の壊し方・・・属性は風か。)

春樹が考えていると二条が

「はい。これが通常弾と魔術弾の差だよ。ちなみに私の属性は風

だからこんな

感じなんだけど 違う属性で行えば全然結果は変わってくるの 火

で行えば着弾と

同時に燃え出すし、水で行えば壁は斬られる、土で行えば壁は崩れ

る、雷で行えば

内部から破壊される。まあまだ皆の魔力じゃこうはならないと思う。

じゃあ皆今

私が出したように魔装具を持ってやってみて。最初は難しいと思うけ

ど慣れたら簡単

だから。」

と、二条が言うと全員が一斉に行く。

(さてさて皆の実力拝見、拝見)

と、二条は笑いながら全員の方を見る。だがこの作業はかなり難しく全員苦戦していた

「うーん。難しい。」

「くそお出来ない。」

かなり苦戦している生徒が目立つその中で

「出来ましたわ。先生見て下さい。」

と、レイラが大きな声で言うと二条がレイラの元に近寄り

「どれどれちよつと見せて。」

と二条が言うとレイラは右手にレイピアを持ち左手に魔法結晶石を持つそしてレイピアにか

かざすと魔法結晶石は淡く光レイピアの中に消えていった。

「どうですか先生成功ですか？」

と、レイラが聞くと二条は

「OK成功だよ。」

と、言うとレイラは

「どうですか皆さんわたくしの実力見ましたか？」

と、どや顔で言う

「でもレイラ展開する時間がまだかかり過ぎだからもつと短縮出来る様に頑張つて。」

と二条が言うと

「任せて下さい先生。わたくしレイラ・ハーゲンボルトの実力見せ付けますわ。」

と、言うとレイラは再び練習を行う。

(さすがレイラまさかこんな短時間でここまで出来るようになるとは。)

二条はそう考えながら周りを見渡す。すると冬野雪音と目が合い

「雪音どう出来そう？」

と、冬野雪音に聞くと

「はい。」

と、表情を変えず一言答える

「じゃあ雪音ちよつとやってみて」

二条がそう言つと冬野雪音は自分の魔装具を右手に持ち魔法結晶石を自分の

拳銃にかざすと淡い光と共に冬野雪音の拳銃に消えていくその速度はレイラ

とは比べられない速度で消えた

（早い！ レイラも初めてにしては早かったけど雪音はそれ以上に早い。

展開速度だけなら2年生と変わらない。）

「じゃあ雪音一回そのまま撃つてみて。」

二条にそう言われ冬野雪音は壁の方に銃口を向け引き金を引くと放たれた

銃弾は着弾と同時に壁を凍らせた。

「うん。雪音合格」

と、言つと冬野雪音はすつとその場所から離れ遠くで全員が終わるの待つ

それを見ていたレイラは苦虫を潰した様な顔をしている。

（さすが四季の一族冬野家の跡継ぎ。才能が凄い。今のこの時期でこの実力。普通ならまだ展開がやつとなのに）

二条が関心してとふつと春樹の方を見ると春樹は壁の前に立っていた「どーしたの春樹？」

と二条が聞いてくるが春樹はそれを無視し刀を抜刀し魔法結晶石をかざすと

淡く光すぐ消える。春樹はそれを確認すると壁に斬りつけると

「バチバチ」

と、音ともに壁が内部から崩れた。

春樹はそのあとを見ながら

「刀が悪いな。安物過ぎる。結構本気で斬りにいったのにこの程度の破壊しか

出来ない。」

春樹がブツブツと一人で喋っていると。周りの生徒が集まってくる。

「志木野君凄い。」

「志木野お前一体何者なんだよ。」

等々春樹はしまったと顔をしながら

「いや、まあ、たまたまだ。」

と、適当にはぶらかし逃げるように壁際まで下がる。

「ここらみんなも自分の作業に戻る。」

二条が手をパチパチと鳴らしながら集まっていた生徒の方へ行くと

「はい。」

と、言っただけで自分の練習に戻る。二条は春樹が斬りつけた壁を横目でチラッと見ながら

（凄い太刀筋、綺麗に壁が斬られてる。しかも春樹の属性雷の内部破壊

もされてる。展開も速かったし、けどなににより一番驚いたのは

春樹

の属性の雷が刀にも帯電してた。」

「魔法結晶石」

を使った魔術にも種類がある。冬野雪音が使った魔術は着弾したと同時に

に壁を凍らせた。この魔術は一番初步の魔術でこの学校の一年生で習える

魔術である。それに対して春樹は使用した魔術は常に魔術が展開された

状態を維持して使える魔術。こちらは難易度が高く普通入学したばかりの一年が使える魔術では無く使用するにはかなりの時間と努力が必要になる。

(この魔術をまだ入学して数日で使うなんて、志木野春樹、彼は一体何者なの。)

と、考えながら壁際に座っている春樹をみる。

(まあちよつと彼の事は調べた方がいいかな。とりあえずこの件は後で報告ね)

と、考えをまとめると二条は他の生徒の方を見る。二条に見られていた事に

気が付いていた春樹は

(・・・まずかったな。つい魔術を使ってしまった。まさかあの程度で

ここまで目立つとは。またあいつ等にどやされるな。)

春樹は小さくため息をついた。全員が練習をしいるのを椅子に座りながら

見ていた二条が急に立ち上がり

「はい、みんな今日はここまで。」

と、二条が言うと

「なんでやねん。未来ちゃんまだお昼やのにもう終わるん？」

と、蓮司が不満な顔を浮かべながら二条に言うと

「あれ？昨日言わなかったけ今日半日授業だよ。」

と、二条が言うと

「うそやん。ロイそんなんゆうとった？」

と、蓮司がロイに言うと

「うんうん。僕も聞いてないよ。」

と、ロイも答えると二条はあれえと言う顔を浮かべ

「・・・言っただけ。」

と、二条が全員に聞くと

「聞いてません。」

と、全員が答える。

「・・・ゴメン伝え忘れてたかも。」

二条が笑いながら逃げる様に部屋から出て行った。

魔法力検査と模擬戦3 (後書き)

おそらく明日は投稿出来ないと思います・・・

魔法力検査と模擬戦4

担任の二条が逃げる様に部屋から出て行き部屋に置きざれにされた生徒達は

最初は啞然としたが今は各自で自主練を行っていた。

春樹は自主練する必要も無かったので部屋から出て校内を歩いていた。

(今日の授業ももう終わったし。少し早いが帰るか。)

と、春樹が帰ろうかなと思いき教室に向かっていると不意に携帯が鳴り出し

春樹が自分の制服のポケット携帯を取り出し携帯の液晶画面を見ると今日の

朝アドレスを交換した長谷川美羽はせがわみづからの初メールであった。

「春樹君もう帰るの?」

と、メールが来たので春樹は

「一応」

と、一言だけ返信すると、春樹がまた歩き出すとまた携帯が鳴りまたポケット

から取り出すとまた長谷川美羽からで

「春樹君今日このあと予定ある?」

と、メールが返ってきたので

「別に特に無し。今から寮へ帰るところ。」

と、返すしポケットに入れようと思った瞬間にまた携帯が鳴り春樹が携帯を見ると

今度はメールでは無く電話だったので春樹が電話に出ると

「あ、春樹君今日このあと予定無いんだったらちょっと付き合っ

くらないかな？」

と、長谷川美羽が言ってくるので

「付き合うつて何かするのか？」

と、春樹が聞くと

「うん。あの、今日の実技の授業展開出来なかっただね。」

と、言う長谷川美羽はいつもの元気はあまり無く少し落ち込んでいる様な声

だったので

「美羽魔法結晶石まほうけっしょうせきの展開が出来ないのか？」

と、春樹が聞くと

「うん。そうなんだ。だから少しコツとか教えてくれないかな？」

と、長谷川美羽が言うので

「俺、人に教えるとかした事ないんだが。」

と、答えると

「うん。それでも全然いいから教えてくれないかな。」

と、長谷川美羽が言うので春樹は少し考え

(・・・まあ、今日は特に予定も無いからな)

「別にいいが、何度も言うが教えるのはした事無いからな。」

と、春樹が答えると長谷川美羽は嬉しそうに

「ありがとう、春樹君じゃあ今使ってた部屋は授業でしか使えないから

第三アリーナの方で練習見てもらってもいいかな？」

と、長谷川美羽に言われた春樹は

「わかった。第三アリーナだな。」

と、言い春樹は電話を切る。

この学校には授業で使う教室と個人練習を行える場所があり第一アリーナから

第五アリーナまで存在する。このアリーナはかなり広大で個人練習から一対一の

戦闘多人数の戦闘まで行う事が可能である。

長谷川美羽に指定されたアリーナに着くと長谷川美羽はアリーナの入り口の

前に立っておりそちらに近づくと長谷川美羽を春樹に気が付いたらしく

春樹の方に駆け寄ってきて

「ゴメンね春樹君」

と長谷川美羽が少し申し訳なさそうにだかどこか少し嬉しそうな表情で言う

「まあ、今日は別に予定も無かったからな」と、言う

「そーなんだ。じゃあ今日はよろしくお願いします。」

と、長谷川美羽が笑顔で言い

「ああ出来るだけ俺も頑張るよ。」

と春樹が言いアリーナに入ろうと思いき歩き出したら

「あら、美羽、春樹さん二人で何をしていますの？」

と、後ろから声をかけられ春樹と長谷川美羽が振り返るとそこにはレイラが居て

そしてこちらへ近づいてきた

「美羽、あなた今日用事があるっていつてませんでした。」

と、レイラに言われた長谷川美羽は

「え、えっと、そう予定が無くなったの。」

と、少し焦った顔で答える

「美羽ちよつとこちらに来なさい。」

と、あきらかに疑っているレイラが長谷川美羽を自分の元に呼びつける

すると長谷川美羽はビクビクしながらレイラの元に近づくと春樹から

少し離れた所に行く

「美羽、どういっつもりですの。」

と、レイラが言う

「な、何が？」

と、長谷川美羽があきらかに動揺しながら答える

「何がじゃありませんわ。春樹さんに練習を見て貰うのは二人でっ
と言う話

じゃなかったのすの？」

と、かなりお怒りのレイラに言われた長谷川美羽は

「ごめんなさい。」

と、少し泣きそうな顔で長谷川美羽が言うと

「まあ、分かったのならいいですわ。」

と、レイラがため息を付きながら言い

「春樹さん。今日わたくしも見てもらっていいですか？」

と、アリーナの入り口で待たされていた春樹に言うと

「ああ。まあいいぞ。」

と、答えると

「じゃあよろしくお願いいたしますわ。」

と、レイラが答えると嬉しそうなレイラと少し残念そうな長谷川美
羽が

春樹の元に帰って来たので三人で練習の為アリーナに入る。

「えーとレイラも魔法結晶石の展開が出来ないのか？」

と、春樹の横を歩いていたレイラに聞くと

「わたくし展開は出来ますの。その先が中々出来ないのですの。」

と、レイラが歩きながら答える

「と、言うことはあと少して所だな。まああとで一回見せてく
ね。」

と、春樹が答えると

「春樹君私の事も忘れないでね。」

と、長谷川美羽に言われた春樹は

「ああ。分かってる。美羽もちゃんと見てやる。」

と、同じく春樹の横を歩く長谷川美羽に言っているとアリーナの前
に到着

扉を開ける。アリーナの扉はかなり分厚くおそらく通常の銃弾で

は貫通する

事も出来ないような分厚さである。

扉を開き中に入ると他のクラスの生徒も練習を行っていてアリーナの中はかなり

賑わっていた。春樹達はその中で人が余りいない場所に移動し

「まあこのあたりなら人もいないからいいか。」

と、春樹が言うと同側にいた長谷川美羽とレイラも頷きながら

「まあこのわたくしの實力を見せ付けて嫉妬の対象されても困りますからね」

と、レイラは自信満々に言うそれとは対照的に長谷川美羽は

「うん。ここだったら失敗しても目立たないからいい。」

と、言う。春樹はその二人の言葉を聞いてため息を付く

「まあいいや。じゃあとりあえず美羽一回やって見せてくれ。」

と、春樹が言うと同長谷川美羽が

「うん。わかった・・・」

と、少し元気の無い声で答えると自分の鞆から魔装具を取り出し右手に持ち左手で自分の首にかけていた魔法結晶石を持つと一瞬光るが直ぐ

に光が消えてしまう、長谷川美羽は何度も行っが何度やっても結果は変

わらず一瞬光るが直ぐに光が消えるの繰り返しだったのでその様子を見

ていた春樹が

「美羽・・・コツて言うわけじゃないが俺がいつも魔術を使うときに心掛けている事が一つだけある。」

と、春樹が言うともうやけ気味で行っていた長谷川美羽が春樹の方に振り返る

「それはな・・・自分を信じる事だ。心の中に少しでも迷いがあるとそれに

影響して魔術も使用出来なくなる。だから自分を信じる。これが俺

からのアドバイスだ。」

と、春樹が言うのと泣きそうな顔をしていた長谷川美羽は自分の眼を擦り

「ありがと春樹君。わかった一回やってみる。」

と、長谷川美羽が言うのと魔法結晶石を握りしめ一人でブツブツと言いながら

展開を行っていく。

長谷川美羽が一段落したので次はレイラの番なのでレイラの方を見るとレイラ

は自身の魔装具レイピアを構えて展開を行い魔法結晶石がレイピアの中に消えた

と同時にレイピアをアリーナの中にある的に突き刺しレイピアを引き抜くが突

き刺した後はあるのだが殆どレイラの属性雷の内部破壊は行われていなかった。

その突き刺した後をレイラが確認し

「全然ですわ。」

と、呟きながら何度も同じ行為を行う。

その行為を横から見ていた春樹は一つの疑問に気付く

「レイラ。展開からもう一度やってみてくれ。」

と、春樹が言うのとレイラは首を傾げながら

「わかりましたわ。」と、言い一度展開を解除しまた一番最初から

やり直す。

その手順を見ていた春樹が

「レイラ、ストップ。」

と、展開を行っていたレイラを一度止め見付けた問題点をレイラに説明する。

「レイラ、おそらく魔術が上手くいかないのは今の所だ。」

と、春樹が指摘すると「今のわたくしの一連の流れの何処に問題があるんですの」

と、そんな事があるはずが無いと言う顔で春樹の方を見るが春樹は淡々と話を続ける。

「レイラの展開の速度は確かに早いんだか問題はその速度にある。レイラの場合まだ魔術を使うのに慣れていないから展開の速度にレイラ自身がついて

行けてないんだ。だから展開速度を一度さっきの半分まで下げてやってみる。」

と、春樹に言われその内容に納得したレイラは

「わかりましたわ。春樹さんのいった通りにやってみますわ。」

と、春樹に言われた通りに展開速度を先程より半分以上落として慎重に行うとまだ

完璧とは言えないがかなり上手くなった

「出来ましたわ。いかがですか春樹さん？」

と、レイラが嬉しそうに春樹に聞き

「ああ。出来てると思う。あとはその感覚を忘れずにやっていったら大丈夫だと思う。」

と、言うレイラの表情が明るくなり小さくガッツポーズまでしていた。

長谷川美羽とレイラの練習を見るという行為も1時間立つと長谷川美羽も

まだ何度か失敗することもがあるがそれでもかなり展開が上手くなっていた。

「美羽かなり良くなってきたな。」

と、言う長谷川美羽は嬉しそうにVサインをしていると、春樹の横から

「おい、あいつ見たか魔法結晶石の展開どれだけかかってんだよ」

と、声が聞こえ春樹が横目で見るといつのまにか春樹達の側に男子生徒が

集まり長谷川美羽を指差し

「確かに。展開位でどれだけ時間かかってんだよ。」

と、春樹達に聞こえる位の声で喋り笑っている。それを聞いた長谷川美羽は

顔を真っ赤にして下を向いている。そんな長谷川美羽を馬鹿にしていた男子

生徒に気が付いたレイラが

「あなた達一体何様なのですか。」

レイラが長谷川美羽を馬鹿にしている男子生徒の目の前に立ちそう言い放つ。

「ああ、お前誰だよ。」

と、一番最初に長谷川美羽を馬鹿にした長髪の男子生徒がそうレイラに言う。

「わたくし1?4のレイラ・ハーゲンボルトですわ。」

と、レイラが言う

「ハーゲンボルト？ ああイギリスの貴族様が 別にあんたには言つて無いだろ。」

と、長髪の男子生徒はレイラにそう言う

「そちらの長谷川美羽はわたくしのお友達ですわ。」

と、レイラが言う

「長谷川・・・どっかで聞いたことある名前だな・・・ああ下位の一族か。」

と、長髪の男子生徒が思い出したかのように言い

「まあ下位の一族だったら仕方ないよな その程度の実力も納得行くぜ。」

と、馬鹿にして言い放つそれを聞いた長谷川美羽は眼に涙を溜めて奮えている。

その姿を見たレイラは火に油を注いだかのように怒り長髪の男子生徒に近寄り長髪の

男子生徒に平手打ちをした。すると平手打ちされた男子生徒は

「お前何するんだよ」

と、右手を上げレイラの頬を叩こうとした瞬間春樹がその生徒の腕

を掴んでそれを止めた。

魔法力検査と模擬戦4（後書き）

あけましておめでとうございます。

今年も頑張って投稿していきます。

魔法力検査と模擬戦5

長髪の男子生徒がレイラの頬を叩くため右手を振り上げた瞬間春樹がその腕を掴みそれを止めていた。すると長髪の男子生徒はギロツと春樹を睨み

「あぁんお前誰だよ」と、春樹に腕を掴まれながら長髪の男子生徒は睨んでくる。その回りにいた他の男子生徒も長髪男子生徒と同じく春樹を睨んでくるが春樹は動揺一つ見せる事も無く

「その二人のクラスメイトだ。」
と、春樹が顔色一つ変えずにそう言つと

「あぁんお前関係無いだろ出てくるじゃねーよ」
長髪の男子生徒が春樹に掴まれていた右手を振りほどき春樹の正面に立つと

「この女はこの俺風間俊也の頬を叩きやがったんだ。やり返さないと気が済まないだよ。」

と、長髪の男子生徒は怒りを表にしている。だが春樹は冷静に「それでも男が女を殴るのはダメだな。」

春樹は冷静に返すがレイラに頬を叩かれ怒りが収まらない長髪男子生徒は

「男女関係無いんだよその女は名家の風間の次期後継者を顔を叩きやがったやり返すのは当たり前だ！」

風間家

とは、日本の魔術師の一族で上級の貴族に当たる。現在日本にはこう言う魔術師の一族が多数ありその最上級が四季の一族になる
長谷川家は階級もかなり低く一番下の下級貴族になる。

こういった一族の特徴は苗字に火水風雷土光のどれかが使われてお

りこの漢字を一切捻らず使っている一族が上級貴族で長谷川家の様に少し漢字を捻り使われている一族が下級一族になる。因みに他国でもこれと似たような一族がありレイラのハーゲンボルトも名前に雷の意味を持っているので上級貴族になる。 「確かに殴ったレイラが悪いのは認める。だが最初に喧嘩を売って来たのはそっちだ。」

と、春樹が一步も引かずにそう言うのと風間俊也は春樹をジロツと見ながら

「お前名前は？」

と、風間俊也が春樹に聞く

「志木野春樹」

と、春樹が言うのと風間俊也は少し考えそして

「知らねえな。てかお前名家でも無い奴が俺の腕を触ったのかよ。」

風間俊也は春樹の事を馬鹿にしながら言い後ろにいた他の生徒もケラケラと笑っている。

基本魔術の学校に通う生徒は名家の人間や貴族の人間が多数を占めている。春樹の様に無名の家柄は少なくこういう罵倒や卑下の対象になる事も少なくない。

春樹は小さくため息をつき

「……こういうバカが国の上層部に行くから……下らない事が繰り返されるんだ。」

と、春樹が小さな声ぽつり言う。

「ああん。お前今なんか言ったか？」

と、風間俊也が春樹に言うが春樹は眼も合わさず

「もう、俺達帰りたいんだけどいいか？」

と、春樹が風間俊也に言うのと馬鹿にしたような言い方で

「ああいいぜ。土下座して謝ったらな。」

と、風間俊也が言うのと回りにいた男子生徒もげらげらと笑う。

春樹が馬鹿馬鹿しいのと顔を浮かべ長谷川美羽とレイラの元に行こ

うと歩き始めた瞬間今まで笑っていた男子生徒が笑うのを止めて魔装具の銃を春樹に突き付ける。

「おいおい何処行くんだよ。」

と、春樹の頭の魔装具の銃を突き付ける。だが春樹は何も言わず歩みを進めるが他の男子生徒が春樹の前に回り込み同じく魔装具の銃口を春樹に向けるすると春樹は歩みを止め

「何のつもりだ？」

と、先程までとは違い声も低くなりかなりの威圧感がある。そして前で銃口向けている男子生徒を睨みつけると男子生徒はビクツとして数歩後ろに下がる。それを見逃さなかった春樹は直ぐさま体を前屈みしアリーナの床を蹴る。すると五メートルはあった距離が一瞬で縮み春樹の前で銃口を向けている男子生徒の右手を蹴り上げると男子生徒の持っていた魔装具の銃が空を舞う男子生徒は何が起きたか解らないという表情を浮かべていが春樹は再び動き出す。啞然としている男子生徒の腹部に一撃を入れると直ぐさま次の行動に移る。またアリーナの床を蹴り次は春樹の後ろにいた男子生徒との距離を縮めていく。今回先程より少し距離があったが男子生徒は反応出来ない。春樹は男子生徒の懐に入ると銃の引き金に自分の指を入れ発砲出来ない体勢にすると右手の拳を相手の腹部に一撃入れると男子生徒はその場に疼くまる。それを確認した春樹は男子生徒が持っていた魔装具の銃を奪い取り弾丸を全て抜き取り風間俊也の足元に投げる

「これで終わりだ。さつさと俺達の前から消える。」

と、殺気が籠った冷たい声で言うつと啞然として見ていた風間俊也は「調子に乗ってんじゃねーぞお!!!」

と、激昂した風間俊也は魔装具の銃を右手に持つと直ぐさま引き金に指をかけそれを引く

「ドーン」

と、言う発砲音と共に銃弾が発射され

「ガンッ」

と言う音共に壁に当たり壁をずたずたに切るがそれが貫通される事は無い。春樹はと言うと当たる瞬間に体を捻り銃弾を交わしていた。春樹に当たっていない事に気が付いた風間俊也は

「くそお?!?!」

と言いながら春樹に向かって魔術弾を何発も発砲をするが春樹は紙一重で全て交わしながら距離を縮めて行く

「何で当たんねえんだよ!!」

と、風間俊也が叫ぶと春樹は

「当たり前だ。素人の銃弾が俺に当たるわけ無いだろ。」

と、言い春樹と風間俊也の距離が遂に無くなり春樹は風間俊也の目の前に立ち春樹が風間俊也を睨みつけると

「くそお、俺は風間家の人間だぞ。こんな事していいと思ってるのか。」

と、春樹に言い放つが春樹は鼻で笑い

「ふん・・・そんな事知るか俺には・・・関係の無い事だ。」

と、春樹が言うと風間俊也は銃口を春樹に向ける

「この、距離だったら交わせねえだろ。」

と、言いながら引き金を引くが魔装具の銃から何も発砲されない

「な!何で何も発砲しねえんだ。」

と、風間俊也は困惑しながら叫ぶ春樹はそれを見てため息を一つ付き

「通常の魔術師は銃弾を使う必要が無い。何故か解るか。」

と、春樹が風間俊也に言うが相手が返事する前に春樹は話を進めていく

「銃弾を使う必要が無いって言うのは銃弾に頼る必要性が無いって事だ。」

任務に当たる魔術師は殆どがCランク以上だからな、例えば銃に弾が無くとも引き金を引くだけで魔術弾になる。今のお前みたいに弾丸が無いと使えない魔術弾なんて誰一人使わない。解るかそれがお前の限界だ。

例えどれだけいい家系に生まれてもお前は俺には勝てない。」

と、春樹は風間俊也を見下しながら言うと風間俊也はワナワナと奮

え出し

「なめんじゃねーぞ」

と、風間俊也は右手の拳を握りしめ春樹に殴りかかるが春樹はその腕を掴み後ろに回り込み関節を決めながら首下に手刀を入れるとガクツと風間俊也の力が抜け倒れ込む。

それを見た春樹は一つ息を付き長谷川美羽とレイラの下に近寄り

「・・・行くか。」

と、春樹が言うと長谷川美羽とレイラは無言

で春樹の後ろからついて来る。

アリーナを出ても校内を歩くがその間も三人に会話は無い。

そして校門の所に着くとレイラが

「じゃあわたくし達はこちらなので。」

と、いつものレイラの様な元気は無く春樹も一言

「・・・ああ」

と、答えた。そして今まで黙っていた長谷川美羽は

「・・・春樹君・・・今日は・・・ありがとう。嬉しかったよ・・・

・私の為に怒ってくれて。」

と、言い長谷川美羽とレイラと別れた。

春樹と別れた長谷川美羽とレイラは自分達の暮らしている寮に向かつて無言で歩いたが長谷川美羽が口を開く喋り出した

「・・・ねえレイラ、春樹君って一体何物かな。」

と、レイラに尋ねると

「全く分からないですわ。」

と、歩きながら答える

「・・・いい人だよね。」

と、長谷川美羽がレイラに再び尋ねると

「……そうですね」
と、レイラが答えた。

担任の二条未来は今完全に忘れていた職員会議に参加していた。

「今年の新入生は有力な生徒が多いので恐らくこの中から騎士になるものも現れると思います。」

一年担任主任の壬生が全教職員の前でそう言い張るとそれを聞いていた二年、三年の教員は

「ほお？壬生先生がそんな事をいいますかそれは将来が楽しみです
ね。」

と、言い二年、三年の教員達は新入生の魔法力検査の結果に目を通していく

「流石冬野一族一年のこの次期で既にDランク相当の魔力ですか」
と、二年の教員が驚きながら書類に目を通す。

「ハーゲンボルト家の御息女と風間家の弟の方もEランクも中々です
ね。」

と、書類をペラペラとめくっていく
「あとは似たような感じですかね。」

と、全データを見終わり書類を机に置くと二条が急に立ち上がり
「先生方に見ていただきたい生徒のデータがあるんです。」

と、二条が言うデータ用紙を全教員に配って行くそれを見た全教員は黙り込み

「……」

すると一人の教員が口火を切り

「な、何ですかこの結果は。」

と、驚きを隠せない声で言うと

「そ、測定不能こんなの始めて見ましたよ。」

「二条先生。測定機が故障してたんじゃないんですか。」
と、結果を見た教員が聞くと

「いえ。何度検査をやり直しても結果は変わりません。しかもこの生徒一年生で雷の属性の帯電が既に使えるんです。」
と、二条が言うると他の教員達は驚きを隠せないように

「入学したてで帯電が出来ると言う事は既にDランク以上の魔力を持っているって事ですか。」

と、他の教員達もこの話題で持ち切りであった。すると今まで黙っていた一人の教員

「……二条先生この生徒のプロフィール有りますか？」

と、一人の教員が二条に聞くと、今まで話をしてきた全教職員が会話を止め全員が黙りこんだ。二条はプロフィールが書いた書類を会議室の一番真ん中に座る老婆に書類を渡す老婆は二条から渡された書類に目を通し終わると書類を机に置くと一人の教員が

「どーかされましたか夏目校長。」

と、教員が言う

「いえ。何でもありません。会議を続けて下さい。」

と、夏目が言うると会議が再び始まった。夏目は会議を聞いていたが頭の中は先程見た書類の事を考えていた。

（先程見た書類の生徒確か名前は……志木野春樹昔何処かで会った事があるような。何処だったかしら……）

と、夏目は考えるが 何故か思い出せない

（最近年かしら）

と、夏目は考えながら会議にも耳を通していく。

長谷川美羽とレイラと別れた春樹は一人寮に帰っていた。

（春樹珍しかったねあんなに怒る春樹見たのは久しぶりだったよ）

「秋人か？そうか別にそんな事は無い。」

（まあ確かにあれだけ怒った春樹を見たのはあの時以来だな。）

「夏陽もそんな事は無い。と言うか昔の話もしなくて言い。」

（そっだよ夏陽、春樹は昔の話されるの嫌いなんだから。）

「秋人もそう言う訳じゃ無いから」

と、うるさい二人にあっては「だこーだ言われ帰路に着いた。」

魔法力検査と模擬戦5（後書き）

ここから少しずつ春樹の過去が見えてくる予定

魔法力検査と模擬戦6

春樹が寮に着き、古めかし寮の階段を上がっていると、

「おう、春樹やないか。」

と、後ろから声をかけられた春樹は

「蓮司か、」

と、言うが足を止める事も振り返る事もせず、階段を上がっている
と一階から蓮司が走りながら

「ちよ、ちよ、ちよっと待たんかい春樹!!」

と、呼ばれた春樹は階段で立ち止まり、蓮司の方に振り返る。すると、
蓮司は息を切らしながら、春樹の五段ほど下の階段に立つと、

「お前な、人呼んどんに、何でガンガン先行くねん。」

と、蓮司が不満全開の顔で、春樹に問い詰めるが、春樹は

「で、何の用だ。」

と、春樹は蓮司の不満など全く気にする事も無く、早く用件をいえ、
という表情を浮かべると蓮司は肩を落としもう諦めた様に

「はー、何かもう怒んのもアホらしなつたわ。」

と、ため息と共に下に俯いた。そんな蓮司の姿を見た春樹は、不
思議そうに首を傾げる。

「で、蓮司、さっきのは何の用だ。」

と、拗ねて夜御飯を食べている蓮司に聞くと

「え?ああ、さっき未来ちゃんから、連絡入ってな、明日の朝のH
R無くなつて、全校集会になつたらしいで。」

と、蓮司が、左手で井を持ちながら、春樹の質問に答える。

「何でだ?」

と、春樹が蓮司に聞き返すと

「イヤ、俺が知つとる訳、無いやん。」

と、蓮司間髪入れずに答えたので

「まあ、そりゃそうか。蓮司が知ってる訳無いか。」

と、春樹は納得し、自分の席の前にあつた、料理の皿を片付けて行く。前の席に座つて食べていた、蓮司は、今春樹が言った言葉を考え

「うん？待つて春樹お前、今俺の事馬鹿にしてへんか？」

と、蓮司は立ち上がり、自分が食べた料理の皿を洗っている春樹に聞く

「イヤ、別に。」

と、春樹は言つと

「じゃあ、俺先、部屋帰るから。」

と、言つと自分の荷物を持ち春樹は自室へと戻つて行つた。その姿を見た蓮司は

「あ、おい、逃げんな春樹！！！」

と、叫ぶ声が部屋の入り口まで聞こえたが、春樹は無視し、部屋に入り鍵をかけ眠りに就いた。

朝起き、朝を食べていると蓮司に捕まり寮から学校までの距離を、永遠文句を言われたが、春樹は殆ど聞いておらず学校に着いたとたん

「全校集会つて何処でやるんだ？」

と、文句を言っていた蓮司に聞くと

「え？あ、あー多分第一アリーナちゃうか。全生徒入る所ゆうたら、あっこしか無いしな。」

と、言い蓮司は第一アリーナの方へ向かつて歩き出す。その後ろを春樹と、今まで全く喋っていなかった、ロイの三人で、第一アリー

ナに向かう。少し歩くと後ろの方から声が聞こえ

「三人共ー待ってよ。」

と、呼ばれ春樹、蓮司、ロイが振り返るとそこには、ポニーテールの少女長谷川美羽と、金髪巻き髪のお嬢様、レイラハーゲンボルトの二人が、春樹達の所に駆け寄って来て

「みんなおはよー」

「皆様おはようございます。」

と、声をかけた二人は何故か嬉しそうな表情であった。その二人の嬉しそうな表情を見た蓮司は

「うん？何や二人共、えらいご機嫌やん。何かええ事あったんか？」

と、長谷川美羽とレイラに蓮司は聞くが

「別に何でもないよ。ねえレイラ。」

と、長谷川美羽がレイラに言うと

「ええ、そうですね。何でもありませんわ。」

と、二人に言われたが蓮司は首を傾げているそして春樹、ロイに

「今のどう思う」

と、聞くが二人とも回答は、

「さあ」

と、言う答えが返ってきたので、蓮司が一人立ち止まり悩んでいると、

「ちよつと蓮司早く来ないと本当に遅刻するよ。」

と、言う声に我に帰ると、春樹、長谷川美羽、レイラ、ロイ、は蓮司を置いて先に進んでいた。するとそれに気が付いた蓮司はこちらへ走ってくる

「はあはあ、ホンマ、お前ら、俺一人置いて先行くなよ。ホンマ冷たい奴らやで。」

と、息を切らしながら追いついた蓮司は熱弁する。

「蓮司。熱苦しいよ。押さえて、押さえて。」

と、笑いを堪えながらロイが言うと

「ロイ!!! お前顔が笑るとるわ。やっぱりわざと置いて行ったな。」
と、蓮司が言うと今まで笑う事を我慢していた、長谷川美羽とレイラも笑い出し春樹も苦笑していた。
「お前ら全員笑いよって、後で覚えとけよ。」
と、朝から五人で笑いながらアリーナへと向かった。

第一アリーナに着き分厚い扉を開けるとそこは物凄く広い体育館でそこにはこの学校の生徒の殆ど集まり全校集会までの時間をそれぞれの友人同士で集まり談笑を行っていたその姿を見た春樹が

「この学校、こんなに生徒がいたのか。」

と、春樹が言うと隣に立っていた長谷川美羽が

「そうだよ。何たって魔法学校だからね。世界に4校しか無いから集まってくる生徒の数も多いんだよ。でもここにいる殆どが一年生だよ。」

と、長谷川美羽に言われ春樹が回りを見渡すと殆どの生徒が自分とそう歳も変わらない生徒ばかりであった。

「理由は私達一年生が入学したばかりだから人数が多いけど二年生、三年生に上がるほど人数は減っていくし一年生と三年生じゃ半分以上人数が違うよ。」

と、長谷川美羽が春樹に言うと、春樹は納得し自分達の場所へと、移動する。一年生の場所は一番前で、春樹達は自分達のクラスが居る場所に行くと、その列に混ざり全校集会が始まるのを待っていると、到着して5分程で、全校集会が始まった。最初は、学年主任の壬生が挨拶をする。その内容は、どうでもいい内容で、春樹は猛烈な眠気に襲われる。春樹がフツと壇上の上を見ると、6人の生徒が席に座ってる事に気が付いた。気になった春樹が、横に立っ

たレイラに

「レイラ、前の席に座っている白い制服の連中誰だ？」

と、春樹が小さな声でレイラに聞くと

因みに春樹が今着ている制服は黒を基調とした制服である。

「前に座っている生徒は、生徒会の方々ですわ。」

と、レイラも小さな声で答える。春樹はもう一度壇上の席に座る生徒を見る。

(生徒会か……)

と、壇上を見ていると学年主任の壬生の長い話しが終わったらしく、全生徒が長いんだよ、という空気を出していたが、次に出て来た老婆によつて、その空気が壊される。その人物は、

魔法高校校長夏目咲乃、

四季の一族夏目家先代当主夏目咲乃

大魔導師夏目咲乃、

そして極東の魔女夏目咲乃

夏目咲乃が現れた瞬間アリーナの空気が変わり生徒も教員にも緊張が走る。夏目咲乃は壇上の真ん中に立つと口を開く。その内容は、学年主任の壬生が、話した内容とたいして変わらないが、生徒、教員はその話しに耳を傾けるが、このアリーナの中で一人だけ話しを聞かず、極東の魔女を睨みつける様に、見ている生徒がいる。

(……あれが極東の魔女夏目咲乃か……世界を動かす20人の一人……俺達の人生を変えた魔女……)

と、春樹が睨んでいると

(春樹、駄目だよ。今はまだ動く時じゃない。)

すると、春樹は小さな声で

「わかつてる。秋人」

(わかつてるなら殺気消してよ。他の連中にも気づかれるから。)
「……ああ」

と、言いながらも春樹は夏目咲乃から視線を外さない。

(だから、駄目だって夏陽も何か言つてよ。)

(春樹、いい加減にしる)

「夏陽か、だからわかっている。」

夏目咲乃は、話しを進めていたが、自分に突き刺さる様な視線に気が付き、視線が送られてくる方に視線を移すと、その瞬間突き刺す様な視線は消えた。

(今のは殺気ですか。さて、さて、どちらの生徒でしょうか。)

と、夏目咲乃は話しをしながら殺気を放っていた生徒を探すが見つからなかった。

(上手いですね。先程あれだけの殺気を放っていたのに、今はその痕跡すら残っていない。一体何者でしょうか・・・)

と、考えながら一ついい案が浮かぶ

「今月末に行く春華祭しゅうかさいに、一年生も参加してもらいます。」

と、夏目咲乃が言うと動揺とざわめきが走る春樹はそれを聞くと隣にいたレイラに

「レイラ春華祭って何だ？」

と、レイラに聞くと

「えっと、確か一年に一回春のこの次期に行われる二年生、三年生で行う魔術戦ですわ。」

と、レイラはおでこに右手の人差し指を置きながら思い出すかの様に言う。

すると夏目咲乃が

「今年の春華祭で優勝した生徒は私が短期間ですが直接魔術指導をします。」

と、夏目咲乃が言うとアリーナがざわめくが、夏目咲乃は話しを続ける。

「参加出来る生徒の人数ですが三年生は七人、二年生は十人、一年生は三人とします。詳しく話しは担任の先生に聞いて下さい。」

と、言うと夏目咲乃は壇上から下がり進行役の教員に後を任せると夏目咲乃はアリーナから出て行った。

「じゃあ、今日の全校集会は終了だ。」

と、学年主任の壬生が言うのとアリーナに居た生徒はアリーナから出てそれぞれの教室へと戻る。春樹達も教室へと戻る為に校内を歩いていた。

「なんや、凄い話しになってきよったで。」

と、蓮司は歩きながら言う

「そうですね。春華祭で優勝したら、校長先生からの、直接指導ですものね。」

と、レイラが答えると隣を歩いていた長谷川美羽が

「でも、指導してもらうには、優勝だもんね壁高すぎだよ。」

と、長谷川美羽は肩を落とす。少し後ろを歩いていた春樹は

（だが、これはチャンスだ。夏目に近づく事は要因じゃない。だから直接指導と言うことなら、話しは別だ。必ず優勝して、あの時の真相を聞き出す。）

と、春樹は不気味な笑顔を浮かべた。

魔法力検査と模擬戦6（後書き）

話がやっと前に進み出しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099z/>

魔法世界と高校生

2012年1月6日23時25分発行